

# 古平の物語

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第八十二号（二日発行）  
平成八年七月一日

## 北海の古平風土物語 四九

### 子供たちの四季の遊びと仕事の手伝い (5)

高橋 源五口

この年の（大正年）九月のこと、大鮪が大漁で置き場がなくなり、本陣のチョペタン川の中に入れて腐敗を防ぎ出荷を待つていたことがあった。（冷蔵設備のない時代のことである）学校の昼休みの時間に、みんなこの大鮪を見に走って行ったことを思い出す。この大鮪の中には一メートルを超えるようなものもあつてみんなピックリしたものである。

× × ×

農家の子供たちは、鮫場が終わると畑作物の蒔きつけ、草取り、りんごの袋掛け、除虫菊の刈り干し、苗ものの水やり（なす・きうり・なんばん・キヤべツ・トマト・すいか・かぼちゃ

・あじうりなど）、そして、いちご・さくらんぼ・りんご・なし・とうきびなどのもぎ取り、かんぴょう作り、いも掘り、こんにゃくも掘り、麦やえんばかり、あわ、ひえ、えごま、豆類の刈り落としなどと、晚秋の頃まで手伝いに多忙であった。

また、牛馬を飼う家では草刈り、草切り、牛馬のえさ、乳しぼり、牛乳の配達などと、いつも遅くまで真っ黒になつて働いていたのである。

夏休みに入ると、早朝から早生とうきびや早生りんごの収穫が始まる。りんごの中には熟れ過ぎて落ちるものもあるが、これは「落ちりんご」として拾い集めておいて町から来るかつぎ屋

に売り、それを子供たちの小遣いにしている家が多かったようである。

※ 早生りんごには五十八号・五十九号・生娘などの品種があつて、卸値で一斤（斤＝六百ダラム）当たり 大玉五錢・中玉四錢

・小玉三錢ぐらい

早生とうきび 卸値一本当たり 一錢から二錢

中生とうきび 卸値一本当たり 大・中・小で一錢から三錢

中生秋りんご 十二号（祝）

十二号（柳玉）・旭などで一斤

当り大玉五から八錢・中玉三錢から四錢・小玉一錢から三錢

晚生秋りんご 六号（紅玉）

七号（錦）・九号（黄玉）・十

九号（緋衣）四十九号（国光）花嫁・花魁（おいらん）などで

一斤当たり大玉三錢から五錢・中玉三錢から四錢・小玉一錢から三錢

とうきびのはねもの 普通の約半値

りんごのはねもの 落ちりんご 普通のものの三分の一ぐら

いの値

当時、古平産のりんこのほと

んどは小樽商人に引き取られ、

サンパ船に積まれて曳き船で小

樽へ運ばれてから、道内や樺太

（サハリン）・シベリヤ方面に

売られていたのである。

この収穫の時期になると、漁家の生徒と農家の生徒たちとの間で品物の交換が始まる。する

めとりんご・なし・ゆでたとう

きび、ときには昼の弁当まで交換することがあつた。

ふもとには幅一、三丁、

長さ十一、三里にわたつて林があり、シエンクイ

という木が多いがこれは

エゾマツといわれ檜に似

ている。またトドという

木も多く生えている。

リイシリ 嶺  
(利尻岳)のこと

費谷(宗谷) 海上十八里の沖にリイシリといいう高山がある。西蝦夷地第一の高山で、回りの青々とした海中に厳しい独立している。

アイヌの[ことわざ  
世間ばなし集]から

ふもとには幅一、三丁、長さ十一、三里にわたつて林があり、シエンクイという木が多いがこれはエゾマツといわれ檜に似ている。またトドという木も多く生えている。

➡ (次ページ下段へ)

■有望な鉱山と確信  
会長に買収を懇請する

昭和四年(昭和)、株式会社鉄興社が、休山していた稻倉石鉱山の発展性に目をつけこれを買収した。

当時、鉄興社は鉄の製錬に無くてはならない『フエロアロイ』といわれる製品を製造していく、さらにこの事業を拡大しようと計画中であつたことから、その原料を確保するため大きなマンガン鉱山を手に入れが必要があつた。

そのような時、たまたま後の専務取締役になつた佐野隆一が稻倉石鉱山のことを見知り、自ら踏査して買収に踏み切つたもので、その間の事情を「鉄興社五十年史」の中で次のように述べている。

『稻倉石鉱山を買つたのは昭和四年、資本金が十五万円のとき

—百年の歴史を閉じる—

# 稻倉石鉱山

がたくさん着いていて、それがして真っ黒なマンガンの沈殿物を発見して私は驚嘆した。

木炭のようになつて堆積していく、その中に坑木の破片や、山の藻をシンに

鉄興社が稻倉石鉱山を買収したのとほぼ同じ頃(昭和一年)、現在の古平町役場町役場が建築されたが、その時の総工費は一万五千円であった。

当時の鉄興社は、筋コンクリート造りの近代的な

で、北海道に有望なマンガン鉱山があるというので出かけて行つた。行つて見るとそれは金銀を掘つていた山で、休山といふよりもほとんど廃山同然といつていい鉱山だった。

私は案内人に伴われて、古早の町から馬で鉱山に向かつた。山には一面に北海道特有の丈なすイタドリをはじめ、雑草がぼうぼうと生い茂ついて道などわからず、案内人は鎌で雑草を刈りながら案内してくれた。私が、普通のいわゆる鉱山技師ば、こんな鉱山は捨てて顧みなかつたかも知れないほど坑道はつぶれ、全く荒れ果てた山であつたが、ありがたいことに私は化学の教育を受けていた。

「これは大したものだ」ここのは休みなしに動いている。その水の中にあつてこんなにもたを強く懇請したのである。この鉱山にはどれだけマンガンが埋蔵されているかわからない。これはどうしても買わなければならぬと決心し、一万一千円で契約して東京へ帰つて来た。

(以下略)

東京へ帰つた佐野隆一は、直ちに取締役・会長であつた棚橋寅五郎に会つてこのことを報告し、将来ともに有望な鉱山であることを推奨すると共に、買収を強く懇請したのである。

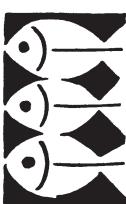
◇ ◇ ◇

後にこの本をまとめた人が、エトピリカというのは千島地方に棲む鳥で、利尻島にいたというのは不思議であり間違ひではないか、と油に書いている。

(前ページより続く)

麓には唐から渡つて来た瑞鶴(るり)という鳥がいて、頭が少し白く、そこに黒がまじつていて、雀に似

た鳥であるが蝦夷雀といつてゐる。



# 遙かなる故郷の思い出

[22]

橋義春

私の母はアメリカの出身なので、子供の頃によく美国のお祭りに連れて行つてもらつたことがあるが、ふとその頃のことを思い出した。

アメリカでも山車を引くときはやしは笛と太鼓に合わせて、

「ヨーイ ヨーイ ヨーイ エンヤッ」と、やるもと思つていたらこれがどんでもなかつた。

みんなが大声で大合唱をやつてゐるは、なんとも卑猥な歌であったが、これがまた笛のメロディーと実にピッタリと合つてゐるのである。見物している大

人たちは、照れかくしかニヤニヤ笑つてゐる。

ところがこれを見ていた校長

先生が烈火の如くに怒つて、

「今後、小学生が山車を引くこ

とは禁止する。そのため私が

美國町を追われることがあつて

も後には引かない。」と宣言をしてしまつた。

さア一困つたのは子供たちだつた。私のいとこたちも、

「古平はいいなアー オレたち

はもう山車を引けなくなつてしまつた」

と、しょんぼりしてゐた。

さて翌年、お祭りが近づくに

つれ子供たちの山車引きの願望

はつるばかりで、ついに、見

かねた親たちが校長先生のところへ行つて、

「親たちにも責任があり、今後

は絶対にあのような卑猥な歌は

歌わせないので、今年も子供た

ちに山車を引くことを許してほ

しい」

と懇願した。校長先生も、

「それならば——」

ということで、やつとお許しが出たというエピソードがある。

子ども心にも「立派な校長先生だナ」と尊敬した。  
思えば、はじめて青梅市を訪ねてからもう三十年の歳月が流れている。

ある時『東京さわやか散歩』というハイキングの本を手に入れ、読んでいるうちに青梅市・吉野梅郷の『梅まつりコース』のことが目にに入った。

「これはひょっとしたら、古平

の祭りばやしの謎がとけるかも知れない」

と思い、早速、青梅市の梅まつ

りに行つてみることにした。

その本に出ていた案内では、

「三月の第二日曜日の梅まつ

には山車や神輿が出る」とあつたので、それをうのみにして、平成六年三月の第三日曜日にビデオカメラを持って行つてみたところ、この年は第一日曜日に梅まつりはすでに終わっていた。がつくりして帰り、来年、再度挑戦をしてみることにした。

（東京都小金井市在住）

建網の規制方に強制割り立て

余市山道（古平側）を改修

当時の古平・余市郡間の山道は狭い上に険しく、冬は凍死する事故もあり、歩くのも難儀する道路であった。

明治十七年、古平郡では道

路改修の願いを開拓使に出し

費用は官費で、人夫は有志で

にかかり、七月には荷馬車が

通れるような道路になり、持

ち分の工事を終わつた者には

次のような証書を渡した。

右明治十八年分請持丁場成

功ニ付此証ヲ相渡者也

明治十八年月日

翌明治十八年、時の郡長で

功ニ付此証ヲ相渡者也

明治十八年月日

古平郡役所

太陽の下、海の青さも、山の緑もいつそうその濃さを増してきたこの頃ですが、古平の夏をお告げる『琴平神社例祭』が近づいてきました。伝統を誇る勇壮なお祭りは古平の歴史であり、ひとつの顔でもあります。

先日、古平のお祭りのことについて調べたい、ということで

古平高校の女生徒が町史編さん室へ来ました。お祭りには大変興味があり関心も深いようでした。

何しろあの特異な面を付けた

扮装はスター性が十分であり、お祭りの最後を飾る天狗さんは、火ぐぐりで観衆の興奮は最高潮に達し、そして静かにお祭りの幕がおろされます。

実は前に、琴平神社の山口宮司さんにお祭りのことについて書いていただき『せたかむい』に載せたことがあります。

(第一・二号 平成元年)

しかしそれから年数もたち、

当時は百五十部くらい(琴平夏十舞)の発行でしたので、せつ

かくの記事もあまり目に触れないかったのではないかと思つておられます。それでお祭りをひかえたこの時期にもう一度ご紹介をしますので、改めてふるさとのお祭りを見直して下さい。

◆古平郡総鎮守琴平神社  
御由緒御祭仲

古平郡総鎮守琴平神社は、慶応元年(1865)五月に箱館奉行所へ願い出て、古平御用地より丸山

# 琴平神社例祭

## 火渡り 神事

の麓(さき)新地町三十四番地に

社地の割譲(だきとう)を受け、京都より御神体を下附され、慶応三年(1867)五月に仮社殿を建築し鎮座、慶応四年七月に神殿と拝殿を造営竣工した。

(棟梁、費用などは不明)  
御祭神は大物主神(オウモノヌシノカミ)・八重事代主神(ヤエコトシロヌシノカミ)・保食神(ウケモチノカミ)・崇徳天皇を奉斎(ほき)し、古平

九日宵宮祭、十日を例祭日とし十一日に還御祭を斎行(さいこうし)します。

◆火渡り神事の由来  
九日宵宮祭、十日を例祭日とし十一日に還御祭を斎行(さいこうし)するようにになった。」といふ記述があるところから、それ以後のことと思われ、時代と共に形態が整い、また変化してきたものと思われる。

昭和二十四年五月十日に発生した西部地区の大炎の際に、社殿はもちろんのこと、神輿をはじめ諸道具の一切を焼失したわけであるが、その後、氏子各位の奉納、寄進により現在まで整備され続けて来たわけである。

過去、道路が未舗装の時代には、参道の入口に忌火を燃やし火渡りをしたのであるが、道路が舗装された現在、舗装されていない御旅所(おとせじょ)である浜町恵比須神社の境内(七月十日の夜)と、七月十一日の夜、還御祭前に本町の「みどり公園」地内との二度執行している。

次に『火渡り神事』、または『御渡入り(よどり)』とも言わるその様子を描写してみよう。

つている感がある。

現在の御神輿渡御行列の形態が整つたのは記録が無いので定かではないが、古平町史に「明治十三年、氏子の寄付により神輿を新調し、祭典の渡御に使用している。

火渡り斎場(きじょう)に到着し、渡御行列中の猿田彦は、これら始まる火渡りに備え、面をかぶり直し、朱の装束(じょうそく)、一本歯の足駄の鼻結に霧吹きして充分に湿らせ、準備の整つたところで、衆人の打ち鳴らす太鼓と笛の調べに合わせて立ち上がり、後方に据えた御神輿に異常は無いか「御改め(みえめ)」をする。御神輿の周りを廻り力繩をゆすっては確認し、終わって元の位置に戻つたところで篝火に点火され、紅い炎が空中に舞い上がり、いよいよ火渡りの開始を告げる。

燃え盛る炎に向かって、先ず警塙係(けいとうか)が祓い清め、獅子舞いが祓いの舞いを終わったところで大榊(おおさか)が火渡り、一段と太鼓、笛の音が高まり、いよいよ猿田彦の出番である。周りを取り巻く数百人の観衆と宵闇、これから始まるであろう火の饗宴を期待してどよめきの中、白毛を植えた朱の面、朱の装束、右手に手鉢、左手には中啓(ちゅうけい)を振りかざしてすつと立ちあがり、辺りを睨み回

す。紅く燃えあがる炎の光を浴びて「王様の如き姿である。

篝火の前に進み行き、右手の鉢を口に空を切り、祓いの所作

しよぎ、燃え盛る炎の中に手鉢を差し込んで安全を確かめる所作、そして後に退いていよいよ火渡り、力強い太鼓と笛の音、觀衆のどよめきの中、二度、三度と燃え盛る炎をかき分けるよう火渡り、火渡りをするたびに夜空に舞い上がる火の粉、觀衆のどよめきと拍手の中、御社へ一気に駆け上がる。

大觀衆の興奮の冷めやらぬ間に、今度は御神輿である。数十人の若者が昇きあげた金色の御神輿、炎の衰えた篝火にカンナ屑が投げ入れられ、再び燃え盛る炎に向かってワッショイ、ワッショイの掛け声諸共に突き進み、突き抜ける。炎に包まれて金色に輝く御神輿、夜空に舞い上がる火の粉、觀衆の興奮も最高潮に達し、三度の火渡りを終えた御神輿も御社目ざして一気に駆け上がる。

後に残された興奮の醒めやらぬ觀衆は、炎の衰えた篝火によくやく火の饗宴の終わりに気付

き、三々五々家路につく……。このようなことなので、「古平祭り」は「火祭り」であるかの如き印象を与えているものと思われる。

また、このような過激な火渡りを行つたのは、御神輿昇きの奉仕者が「板子一枚下は地獄」と言われる、危険な漁業に従事する若者たちだったため、罪穢れを祓い清める「火渡り」をすることによって、自分たちの諸々の災厄もいつしょに祓い清めてもらい、安全に漁業に従事できるようなどい「願い」や「祈り」がこめられているものと思われる。

このような神事を行つているところは、道内では無いものと思われる。しかし、どこの神社でも例祭には御神輿渡御をするところは多く、還御の際には参道の両側に篝火を焚き、その間から「古平のお祭りは、火祭りなのですか?」というような照会が多くあり、地元の人も「火祭り神事」の眞の意味がわからなくなつてしまっているので、記録として書き残しておく必要を感じていたわけである。

◇ ◇ ◇  
近頃、祭典が近づくと旅の人から「古平のお祭りは、火祭りなのですか?」というような照会が多くあり、地元の人も「火祭り神事」の眞の意味がわからなくなつてしまっているので、記録として書き残しておく必要を感じていたわけである。

（終わり）

さて置き、自分は篝火の焚き役として数十年にわたつて奉仕された。また、火渡りを行つた翌朝は篝火の燃え残りを競い合つて鳴居に釘で打ちつけ、炎厄の家の拾い、家に持ち帰つては入口の鴨居に釘で打ちつけ、炎厄の家のに入つのを防ぐ御守りとする習慣もあつたが、現在のようにキャンナ屑を使うようになつたために、いつしかその習慣も薄れてしまった。

なお、篝火を焚く燃料として昭和二十三年までは、神社の真向かいで営業していた粧屋の主人が、一年間に出てる粧肩を保管



文

## 吉平ホトトギス会

新緑の山影映える港かな

福井幸平

退院の夫を氣づかう夏料理 岩瀬みのる

帰り来て庭満開の花あかり

山口浪

退院の気ままな試歩や閑古鳥

老ホーム健康食の夏料理

花吹雪母亡き庭の車椅子 木村芳園

銀杯に戦後を偲ぶ古稀の春

越野敏雄

久方の京の街中祭店

点滴の終わりしあとの日永かな

越野清治

春宵の子規の句閑す法隆寺 仲谷比呂子

新緑の香りに酔える峠湯宿

大和田伊絵

金閣寺映せし池の日永かな  
うたたねの居間に郭公届きけり

運動会記録保持者の孫走る

越野清治

初もぎの胡瓜の毬の痛さかな  
雪崩禍の仏を偲ぶ百か日

万緑の一ト日を里の湯に浸り

仲谷美砂

海霧の濃きここが母恋という町よ  
郭公の近きに棲める吾娘の家

在りし日の夫よみがえる夕牡丹

齊藤波留

久に来し客に新茶の封を切り  
丸山の裏を巡りて独活を探る

水着きて胸豊かなる孫となり

福井久美子

お地蔵の野露にぬれし莓かな  
野仏に剪りしばかりの山つづじ

あるだけの西瓜を叩き音色買う  
波止何処もすけそはずし女修羅場かな

越野スミ子

獨活採りやもう先客のありしあと

本間正次郎

渡辺ハツエ

黄泉路坂夫はどこまで行つたやら

葬儀済み人帰りゆく孤独感

「若いなあー」自転車前後に孫を乗せ

茶柱に悲喜こもごもの日々ありき

石井愛子

皺一つふえる度毎知恵うすれ

お茶すすり落葉いとしむ余生かな



ぬけの食べ物のかかわり

2

福井幸平

子どもの頃、おかゆのことを「キャッコ（カッコとも聞こえた）食べたか」とか、「オライで（俺の家で）南瓜のキヤツコだぞ」。などと言つていたことをふと思ひ出して！

それにもしても、当時は粗食にして自然食、海のもの、山のもの、みんなおいしく頂いたものです。ご承知かも知れないが、卵、バナナなどは年に数える程しか口に入らないし、肉類などは縁のない食べ物だった。カレーライスも芋カレー、或はたこか蒲鉾入りが普通であつた。昔の納豆（わらで包んだもの）は特別な納豆臭があつたし、これも各家庭で余熱を利用して造つていた。忘れられないものの一つに、あのマサカリ南瓜がある。ホコホコしたおいしさはおいしさは今の南瓜とは一寸味が違うようだ。



お米は大事に食べたのでしよう。芋、南瓜、おかゆばかりだつた。三度三度白いご飯を食べられる人はそんなにいない様だつた。麦の入つたご飯もよく食べさせられた。なにしろ一家族十人をこえるのは珍しくなく、子どもだけでも七、八人はいたから、子どもが子どものお守りをする習慣があつた。当時の親としては、多分誇らしげに何人教育したとか、何人も育てたと言うかも知れないが、私に言わせれば育てたではなく、育つたのだと申し上げたい。今、子どもをしょつてる（帶で背負う）光景などお目にかけない。つまり、子だくさんの故の当時の食生活（食文化）は素晴らしい生活の知恵だつたのだ。例えば、漬物などは何樽も漬けたし、ほかに鉈切りの早漬け大根など忘れられないうまさがあつた。薪、石炭で炊くからコゲ飯の香ばしさも忘れてしまつた。

前浜ではゴリがよく獲れ、小子女のようにだしも出たし、醤油汁でもおいしく頂けた。

（続く）

昔からの鮫漁にまつわる迷信や、移住して来た人たちの地方の迷信がいつしょになつて、鮫漁場には多くの禁忌（きんい）（禁じられていることや言つてはいけない言葉）がある。

鮫が大漁していた大正時代、漁場では退屈しのぎの話題がいっぱいあつた。

◆ ◆ ◆  
ドドッというもののすごい波音がおさまらないで、電線が強い

んな話をした。

◆ ◆ ◆

この積丹半島の陰の方で、先年、莫大な遺産を残して死んだ

者にも負けない老船頭がいた。

ある時、網揚げの最中に急に時化になつてきて、どうしたものかその船頭の乗つた船が沖へ冲へと流されてしまった。激しい波で、どこかわからない所まで流されて行つてしまい、船頭をはじめ元気な若者たちまで

と合掌し、心からの祈りを捧げた……。そのご加護があつたかどうかはわからないが、それから数日して、老船頭をはじめ乗組員は無事に帰り着くことができた。

するとその夜のこと。老船頭は真っ先に、「命の助かつたお祝だ。今夜はみんな大いに飲め飲め！」とばかりに上機嫌で、自分も盛んに酒をあおつた。

それをみて一人の漁夫が、つかり疲れ果ててしまった。「もうなんもできねえ。神様か仏様にでもすがらねば——」と弱音をはく程、全身が綿のように疲れ切つていて、「もうだめだ」

ひとりが言うと、「ほんとだで……」と、そこにいた仲間が口をそろえる。

やがて世間話にもあきてきた頃、そこにいた一人の漁夫がこ

いてから大声で、

「どうぞ命をお助けください。われわれをお守りください。そ

の代わり、私は命から二番目とすつごく気丈な、それこそ若い

い口にしません。」

「今度こそほんとうに酒をやめます。」

そこまで幸運な人たちのか、このときもまた無事に浜に帰り着いたのである。

さすがの老船頭も今度は酒をやめ、酒を見る度に、「ナンて意地の悪い金比羅さんだべ」と、しきりにこぼしていた。

しかし、それから半年もたつと、いつの間にかまた飲み出している。

気にしたまわりの人たちが注意すると、「ナンボ頭のいい金比羅さんで、もう忘れた頃だベヨ」と、あいも変わらず高笑いをしていた。

しかしその後、老船頭はどうとう酒がもとで死んでいったのである。

## □ 大漁を待つ 困ったときの神頼み

風を受けて鳴つている。そんな

晩のこと、たき火を囲んで四、五人の漁夫が話し合つてゐる。

「今日あたり群衆（ぐしゆう）くるつていふのに……こんな時代で……キモやげなあ——」

ひとりが言うと、

「ほんとだで……」

と、そこにいた仲間が口をそろ

える。

懐から取り出したのが日頃から信心する金比羅様のお守り札だつた。うやうやしく押しいただ

ます。

そこで老船頭はまた金比

羅様に祈つて言うには、

「今度こそほんとうに酒をやめます。」

つた船が遭難するような目にあつた。いよいよ危なくなつてき

たとき、老船頭をはじめ金比

羅様に祈つて言うには、

「今度こそほんとうに酒をやめます。」

それから数年後、老船頭の乗

船が遭難するような目にあつた。

しかし、それから半年もたつと、いつの間にかまた飲み出

している。

気にしたまわりの人たちが注

意すると、「ナンボ頭のいい金比羅さんで、もう忘れた頃だベヨ」と、あいも変わらず高笑いをしていた。

しかしその後、老船頭はどうとう酒がもとで死んでいったのである。

と、板子に体をしばり付ける者までである始末だった。

その時、老船頭がおもむろに

者がかえつてうす氣味が悪くな

り、ちびりちびりとやつたそ

うである。

いつから大声で、

「どうぞ命をお助けください。われわれをお守りください。そ

の代わり、私は命から二番目とすつごく気丈な、それこそ若い

い口にしません。」

「今度こそほんとうに酒をやめます。」

つた船が遭難するような目にあつた。いよいよ危なくなつてき

たとき、老船頭はまた金比

羅様に祈つて言うには、

「今度こそほんとうに酒をやめます。」

つた船が遭難するような目にあつた。

しかし、それから半年もたつと、いつの間にかまた飲み出

している。

気にしたまわりの人たちが注

意すると、「ナンボ頭のいい金比羅さんで、もう忘れた頃だベヨ」と、あいも変わらず高笑いをしていた。

しかしその後、老船頭はどうとう酒がもとで死んでいったのである。

と、板子に体をしばり付ける者までである始末だった。

その時、老船頭がおもむろに

者がかえつてうす氣味が悪くな

り、ちびりちびりとやつたそ

うである。